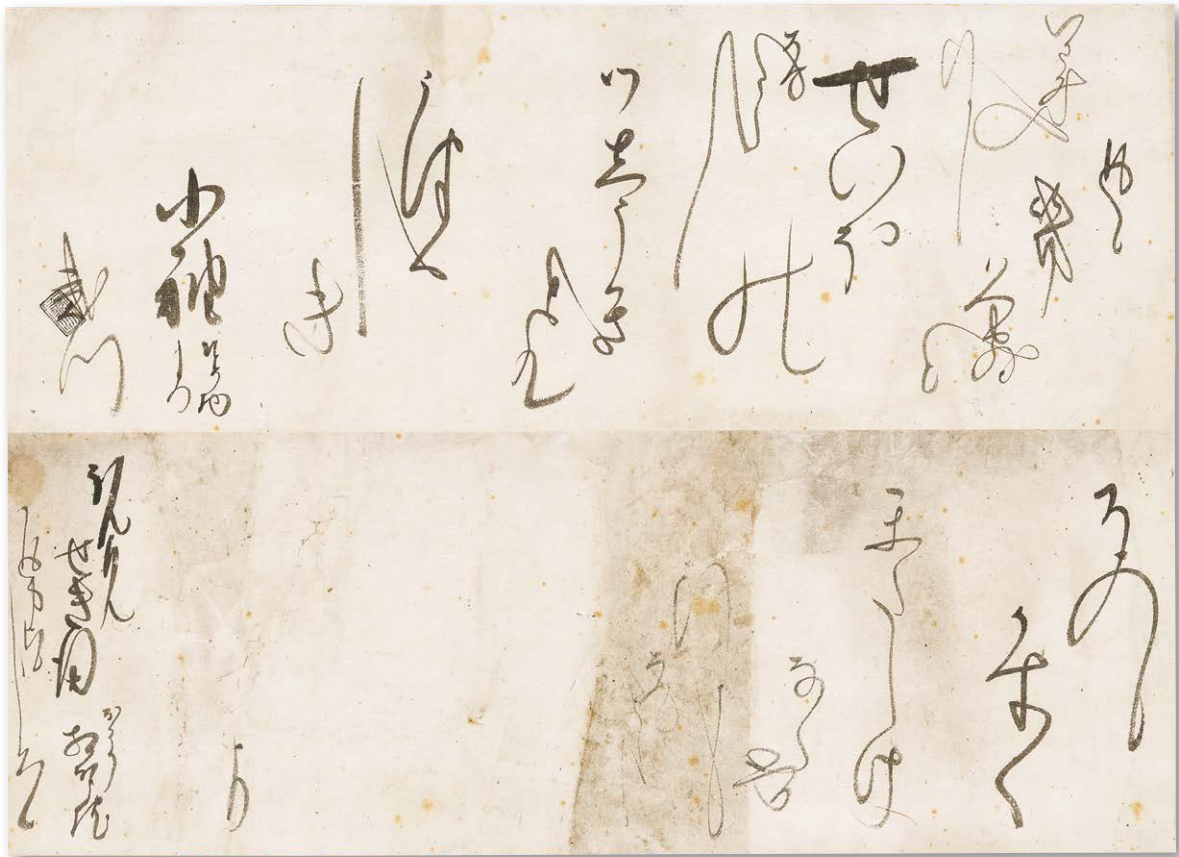


蓬 左

HÔSA



相応院消息

『青窓紀聞』で読む水野正信の〈声〉

『青窓紀聞』の性格

蓬左文庫が所蔵する『青窓紀聞』は、尾張藩の重臣・大道寺家の用人である水野正信（一八〇五～一六八）が編纂した風説留である。全二〇四冊からなり、文化十一年（一八一四）から慶応四年（明治元年、一八六八）までのおおよそ五十年にも及ぶ様々な情報が書き留められている。その内容を見ると、嘉永六年（一八五三）のペリー来航以降（巻四十以上以降）は政治情報が中心となるが、それ以前は寺社の開帳や祭礼、天変地異、火事、刃傷沙汰など、尾張におけるローカルな出来事が中心となっている。奇譚の類いは信憑性の検討を要するものの、特にペリー来航以前の時期に限って言えば、尾張の地域録としても参照の価値は大いにあろう。蓬左文庫ではこの『青窓紀聞』を活字化し、「名古屋叢書」四編として順次刊行しており、現在巻九（八冊目）までを収録した、計二冊を刊行している。

正信自身の考えはほとんど記されず

さて、この『青窓紀聞』は正信が風説を書き留めた編年記録であるため、記手が実際に経験し考えたことを書き記す日記とは性格が異なる。

もちろん、中には正信自身が実見したことなども記事として見られるものの、正信の私見はほとんど述べられておらず、風聞したことや参照した書付などを淡々と書き留めている印象を受ける。しかし視点を変えると、そうした中でごく稀に見られる正信の私見は、かえって彼の主義・主張の強い表れとして捉えることができるのではないだろうか。ここでは、『青窓紀聞』に見られるそうした正信の〈声〉の一部を紹介したい。

江戸四谷敵討ち

文政七年（一八二四）十月、上野国高崎城下（現群馬県高崎市）の足袋職人である卯市（他史料では「宇市（郎）」とも）が江戸の四谷塩町にて、その六年前に殺害された実父源助の敵討ちを果たした。敵の名は「安兵衛」。源助・卯市と同じ足袋屋に奉公していた人物である。

卯市はこの節、江戸四谷塩町辺りで安兵衛を見つけ出すことに成功したという。ところが、安兵衛を見つけた方がいいが、このとき卯市は使いとして仕事であつたため、すぐには討たなかつた。翌日改めて参上すると、安兵衛が足袋屋店で仕事をしているのを見つけたが、この日は上様（將軍）の御成日であつたため、またしても敵討ちを断念し、延引することにした。その後、卯市は一旦高崎に帰り、数日を経て、実父の

戒名（位牌）を持参し塩町へ戻ってきたが、例の足袋屋店に安兵衛の姿はない。まさか討ち洩らしたかと無念に思い、一心に神仏を祈り、捜し歩いていると、安兵衛を見つけ出すことができ、ようやく実父の敵を討ち果たしたという。

以上に見るこの敵討ちのあらましは、『青窓紀聞』巻七（名古屋叢書四編2に収録、p.86～87）に書き留められている。

※この敵討ちについては、同時期の江戸の書肆・藤岡屋由蔵の「日記」である『藤岡屋日記』にもより詳細な記事が見られるが、『青窓紀聞』に書き写されている顛末とは出来事の時系列等が所々相違している。『藤岡屋日記』の方がより正確に事の経緯を記録していると思われるが、ここでは敢えて『青窓紀聞』内の記述をもとにした。

正信による批評

『青窓紀聞』に記されたこの一件の始末の後に、水野は字下げで次のような批評を加えている。

右の始末、大勇にして見事也と云人あり。予ハ左ハ思ハス。父兄の敵を持候者ハ、其敵を見てうかくと期とのばす、何の爲の緩悠ぞや。東照神君の御言葉ニモ、武士たる者父兄の敵討事、手柄にあらず、勿論の事也。然る上ハ期とはづさすして討をよしとす。女を頼りてなり共、早く打て捨へし。洩さるを以、手柄とすと。良將の御意如

此。卯市賤しき身二とりてハ抜群の手柄なれども、敵を見て期を延す事、甚危しく。人二ハ頓死・逐電あり。御成を憚るとの事も予ハ不取。敵討の願なくして敵を討、是一ツの背き也。御成を憚らざる罪と二ツ受しとて、豈重き科と云へからず。上様此辺ニまします事にてもなし。愚也々々。高崎へ帰りて戒名を持参の事ぬるし。予ならハ初より片時も離さず懷中すへし。敵を見かけて遠方の国元へ帰るの始末、愚の甚しき也。取二たらす。

やや意識も入るが、現代語訳すると次のようになる。

卯市による敵討ちを「大勇にして見事」と評価する者がいるが、私はそうは思わない。父兄の敵を持つ者がその敵を見つけておきながらうかうかと期を延ばすのは、どういう緩急か。東照神君（徳川家康）のお言葉にも、「武士たる者が父兄の敵討ちを果たすことは、手柄ではなく、当然のことである。しかる上は、期を逃さず討つのをよしとする。女を頼つてでも早く打ち捨てるべきだ。討ち逃さないことが手柄である」とある。良将のお考えは以上の通りである。卯市は低い身分であるので（そうした身分からすると今回の敵討ちは抜群の手柄ではあるが、敵を見つけておいて期を延ばすことは非常に危うい。人には頓死・逐電ということがあるのだ。御成を

憚るということも私は理解できない。そもそも敵討ちの願いを出さずに敵を討つ、これが一つの背きである（※当時は敵討ちをするために領主に届けを出す必要があったが、卯市は届けを出していなかった。仮に御成を憚らなかつた罪と二つの罪を受けたとして、どうしてそれを重き咎と言わないだろうか（敵討ちの届けを出さなかつたことだけで、十分に重い過ちを犯しているのだ）。上様（将軍）がこの辺りにいらつしやることでもないのだ。愚かなことだ。また、高崎へ帰つて実父の戒名を持参したということもぬるい。私だったら、はじめから片時も離さず懷中しただろう。敵を見つけておいて遠方の国元へ帰るといふ始末は、愚かさも甚だしい。取るに足らない。

随分な酷評であるが、要するに敵を見つけておきながら、期を延ばしたことがけしからんと言うのである。『青窓紀聞』には自身の感想や考えをめつたに記さない正信だが、このことばかりは書き記さずにはおけなかつたのであろう。『青窓紀聞』に見られるこうした正信の（声）は、彼がいかなる関心から種々雑多な情報を書き留めていたのかを考える上でも非常に興味深い。

なお、正信が指摘するとおり、卯市が敵討ちを延引したことはたしかに危うい判断だったかもしれないが、より詳細な『藤岡屋日記』の記事を読むと、卯市にも彼なりの考えがあつて行動し

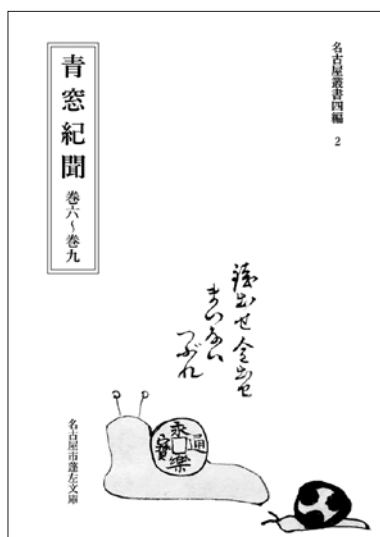
たことがうかがえる。『青窓紀聞』と並べて読んでみると面白いだろう。

蓬左文庫は引き続き「名古屋叢書」四編として『青窓紀聞』を活字化し、刊行していく予定である。江戸後期の人々を賑わせた様々な出来事を学び樂しみつつ、今回紹介したような正信の（声）もあわせて探し読み進めてみてはどうだろうか。

（名古屋城調査研究センター 今和泉大）

【参考文献】

木村慎平「水野正信と『青窓紀聞』——幕末名古屋のソーシャル・ネットワーク」（羽賀祥二・名古屋市蓬左文庫編『名古屋と明治維新』風媒社、二〇一八年）
『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第一巻（三一書房、一九八七年）



名古屋叢書四編2「青窓紀聞 巻六・巻九」文政七年（文政十二年（一八二四）一八二九）
A4版 162頁 2千円

祭りの世界——風流と仮装——

祭りは「祝る」と語源を同じくし、祈りや供物を捧げる宗教的行事が本義です。しかし、次第にその華やかさや賑やかさが強調され、人々の眼を楽しませる娯楽ともなりました。多くの人々が集う、賑やかで楽しげな祝祭からは、「お祭り騒ぎ」という言葉も生まれました。とりわけ「祭礼図」には、趣向を凝らした風流と呼ばれる飾りや造り物、人々の仮装が見た目にも美しく描かれ、祭礼図自体が強い祝儀性を帯びています。

本展では、慶長九年(一六〇四)豊臣秀吉七回忌の祭礼を描き、躍動感に満ちた岩佐又兵衛筆「豊国祭礼図屏風」(重要文化財)をはじめ、幽玄な巻藁船で知られる「津島社祭礼図屏風」、絢爛豪華な山車が登場する「名古屋東照宮祭礼図屏風」(個人蔵)、江戸の「山王祭礼図巻」など、江戸時代の祭礼図を中心に展示します。なかでも自由な発想で、華美を極め技巧を尽くした祭礼の造り物や仮装といった風流に注目し、祭礼図の豊潤な世界へといざないます。

コロナ禍で、伝統的な祭礼が中止を余儀なくされることが多い昨今、絵画のなかではありますが、人々が織りなす華麗な祭りの世界を、ひとときでも楽しんでいただきたいと思います。

※会期中、展示替があります。



重要文化財 豊国祭礼図屏風 岩佐又兵衛筆 江戸時代 17世紀 6曲1双のうち左隻 徳川美術館蔵 7/24-8/23
豊臣秀吉の7回忌にあたる慶長9年(1604)8月に京都で行われた豊国大明神臨時祭礼を描く。上京下京の町衆500人による豊国踊りの大乱舞は圧巻で、華美を極めた衣装に、さまざまに趣向を凝らした風流傘などが入り乱れ、祭りの熱気までもが伝わる。



豊国祭礼図屏風(左隻部分)

豊国踊りでは、「一つ物」と呼ばれる仮装による練り歩きが行われ、人々の目を楽しませた。大黒・恵比寿・布袋などの七福神や南蛮人のほか、竹の子に扮した男の姿もみえる。奇抜な仮装でキャラクターになりきる様子は、今でいうコスプレに近い。



御簾祭真景図略 3冊のうち第2冊 小田切春江転写
江戸時代 文政11年(1828) 名古屋市博物館蔵

白ねずみが登場する童話の挿絵ではなく、今から200年も昔の文政10年に名古屋近郊で行われた御簾祭りの一コマである。御簾祭りは60年周期で行われる祭りで、豊年のきざしを祝い、村々では自由な発想で造り物や仮装を演出した行列が出された。

秋季特別展

名物——由緒正しき宝物——

室町時代頃から、茶の湯道具や刀剣などを主として、名の知られた優品は「名物」と呼ばれるようになりました。名物の条件には、そのものの魅力や世間で有名であることのみならず、豊臣秀吉などの戦国武将や千利休などの茶人といった歴史的人物によって有されていたこと——由緒——に重きが置かれていました。たとえば、室町將軍家の旧蔵品である「東山（殿）御物」は、名物の筆頭として、戦国武将や京・堺の豪商らによって珍重されました。

江戸時代になると、名物の多くは各大名家によって収蔵され、また重大な局面での贈答や茶会で用いられることで、大名家の家格をも象徴するようになります。さらに『玩貨名物記』や『享保名物帳』などの書物によって、名物が一覧に集約・刊行されると、名物は不動の宝物のごとく扱われるようになります。歴史的なお墨付きを得た作品とも言える名物は、現代の作品評価にも大きな影響をのこしています。

本展は、尾張徳川家が収蔵した茶の湯道具と刀剣を中心として、名だたる名物の数々をご覧いただくとともに、その展開をたどります。

※会期中、展示替があります。



重要文化財 唐物茶壺 銘 松花 大名物
南宋・元時代 13-14世紀 徳川美術館蔵

葉茶の運搬・貯蔵に用いられる茶壺は、利休の時代には茶道具の最上位として尊ばれた。本品は美しい釉調からか、特に名品として名高く、「山上宗二記」にも記載されている。「信長公記」には、天正4年（1576）安土城の落成時に、織田信長の前へ「唐物茶壺 銘 金花」とともに並べられ、信長が喜んだ、と記録されている。



脇指 銘 吉光 名物 鯰尾藤四郎

鎌倉時代 13世紀（初代越前康継再刃） 徳川美術館蔵

豊臣秀吉とその息子・秀頼が愛用した名刀で、大坂夏の陣で大坂城が落城の際に焼損したが、徳川家康の命で刀工の初代越前康継が再刃された。『享保名物帳』には、もともと長刀であったのを短くして脇指としたことにより、形が鯰の尾に似たところから名付けられたと記されている。

尾張の筆まめ日記伝(第三回)

鸚鵡籠中記と千代倉家日記(後)

大名行列の光と影

◆いざ、江戸へ出立!

徳川家康が江戸に幕府を開くと、全国の大名を統制する施策を相次いで打ち出した。中でも寛永十二年(一六三五)に改定した武家諸法度では「大名小名在江戸交替所相定也、毎歳夏四月中旬可致参勤」と定め、ここに大名が江戸へ参勤交代する制度が正式に定められた。一般的には四月参勤であったが、御三家筆頭である尾張徳川家は三月参勤とされ、在江戸・在国元の期間はともに各一年であった。これにより、名古屋では二年に一度、春三月になると江戸へ向けて麗々しく出立する大名行列が、いわば一大イベントとして、定着していった。鸚鵡籠中記にも度々出立の様子が日を追って記される。

一例として、元禄八年(一六九五)、三代藩主綱誠が江戸へ赴く時の様子をとりあげてみよう。綱誠が父であり、先代藩主であった光友から家督を相続したのは元禄六年四月のことであるから、元禄八年の江戸出府は、綱誠が藩主となって最初の参勤交代であった。

その出立の日の様子を鸚鵡籠中記は次のように記す(括弧内は筆者注)。

・三月五日 天眼快霽 ○未刻御供揃。同三

点、公(綱誠)江戸へ御発駕。予、真福寺(大須親意)の門に至る。

未刻は今の午後一時から三時頃にあたり、三点は一刻を四分したのうちの三つを意味するので、おおよそ午後二時半頃の出発であった。郭内から東海道へ向けて本町通りを南下する行列を、文左衛門は大須門前で見送った。

鸚鵡籠中記ではその後に「段々立一所に集記す」として、日付を追って出発した人物を順に記している。最も早く出発したのは綱誠の正室(新君)で、二月廿六日立、お付きの者(成瀬吉左衛門)や道中目付など計八名であった。

その後は、道具類を運ぶ一行が相次いで出発する。廿七日には計十七名、廿八日は計八名、廿九日は計一〇名、三月三日は計二十三名であった。この中で興味を引くのは三月三日出発の一行で、「泊り赤坂」と記される。名古屋から三河の赤坂宿までは五十km以上の距離があり、その間を荷物を持つて一日で踏破するのであるから、かなりの強行軍である。

これに比べるとお殿様は少しゆつくりのペースだったようで、初日は尾張領内の鳴海宿で一泊するのが慣例となっていた。三月五日出発の本隊には、元禄元年九月より綱誠の御傳役となっていた渡辺監物(渡辺綱)を始め、総勢七十四名が付き従った。名簿ではこの中に四名の宿割役の者もいた。そして本隊出発の翌日、六日には殿として計十七名が出発し、これですべての者が名古屋を後に江戸へ向かった。

最初の宿泊地となる鳴海宿での様子は、千代倉家の日記に詳しい。下郷家二代当主の知足は日を追って細かく記している(括弧内は補注)。

・二月廿五日 中納言様(三代藩主綱誠)未五日御泊り。御関札来ル。

・二月廿六日 成瀬吉左衛門様御下り。今日五六頭御先立御下り。

・二月廿九日 殿様御宿割未明御越。監物殿宿割。

・三月五日 大代官衆三人、郡御奉行式人御目見へ二御越。殿様七つ比鳴海御着。三郎左衛門(知足の弟)、金三郎(息子、蝶羽)、町口二ツ御目見へ仕候。渡辺監物殿八つ二私宅へ御越。本陣四十一人、下宿五十人。

文中の「関札」は藩主の宿泊を記す立札のこと、本陣門前か宿場の入り口二ヶ所に立てた。また、藩主は本陣に泊まるのが決まりであったが、付き従う者はその人数に応じて一般の旅籠に分宿した。このために宿の手配をおこなうのが「宿割」で、参勤交代の一行が到着する前にあらかじめ宿泊先の宿場へ先回りし、宿の手配をおこなわねばならなかった。この他、藩主の宿泊には大代官や郡奉行など、藩の要人も鳴海宿まで出向き、江戸下向の際はお見送り、上国の際はお迎えするのが通例であった。

翌六日の六つ半(朝七時頃)、藩主一行は江戸へ向けていよいよ東海道を下っていった。鸚鵡籠中記には三月十三日の項に「公江戸へ着御」とあるので、八泊九日の長旅であった。

◆悲しみの上国

隔年で江戸と国元を往き来する尾張藩主がどこで亡くなったのか、鸚鵡籠中記に記される二代光友から五代五郎太までの四人をみてみると、長命で隠居生活を送ることのできた光友を除き、あと三名はいずれも江戸でこの世を去っている。籠中記以前の初代義直(慶安三年没)も江戸、籠中記以後の六代継友(享保十五年没)も江戸であった。これは、参勤交代制度なればこそその結果であろうか。二代光友以降、尾張徳川家当主の墓所は建中寺とされた。葬儀を執り行うためにも、また埋葬のためにも、棺を江戸から国元へ運ばねばならない。

三代綱誠は元禄十二年(一六九九)六月五日四十八歳で、四代吉通は正徳三年(一七一三)七月二十六日二十五歳でこの世を去った。二人の亡骸は中山道経由で名古屋へ運ばれた。鸚鵡籠中記の記録では綱誠は九泊十日(六月十二日江戸発、同二十一日建中寺着)、吉通は十一泊十二日(八月五日江戸発、同十六日建中寺着)を要しており、江戸出府に増して長旅であった。

これに対して五代の五郎太の場合は季節が冬だったためであろうか、東海道経由となった。五郎太は父である四代吉通と同じ正徳三年、十月十八日にわずか数え三歳で亡くなった。まだ正式な名前もつかない幼な子の、早すぎる死であった。棺は十月二十九日江戸を出発し、十一月八日建中寺着の九泊十日であった。

鸚鵡籠中記にはこの間の行程表も記されている。道中の御供は表老中の中条主水はじめ計四十九人。途次は雪の降る日もあった。

晦日(御登)	川崎(御泊)	戸塚
朔日	大磯	小田原
二日	茗根	沼津
三日	蒲原	江尻
四日	岡部	金谷
五日	袋井	浜松
六日	気賀	御油
七日	池鯉鮒	鳴海

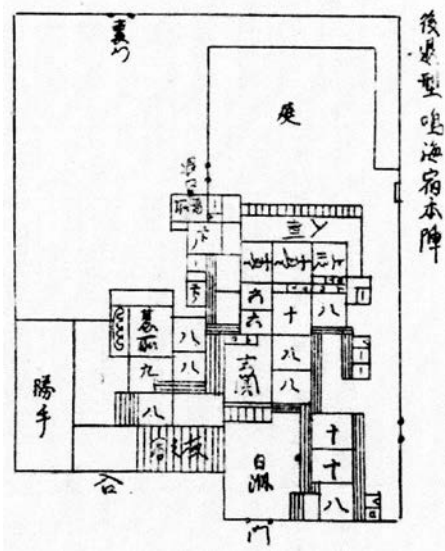
この間、四日には「御供番宿割上着」、六日には「御棺御着二付可罷出廻文あり」とあり、藩士に対して出迎への指示が出されている。

最後の鳴海については千代倉家日記(第三代蝶羽の日記)にその時の様子が記されている。

・十一月七日 雪降昼より止 殿様御遺骸、伊右衛門所(鳴海の本陣)西尾伊右衛門(御泊)御供御老中中条主水、宿庄六方(本町西角の旅籠)、其外下宿方拾軒程也。手前(下郷本家)ハ無之。御代官三宅善八(宝永七、正徳四)不罷之、赴方前横地仁兵衛(元禄十一、正徳五)有之。

棺は、おそらく本陣最奥右手の上段の間に一晚安置されたのであろう。この上段の間は、藩主が宿泊する際に用いる部屋であった。この記事で注目すべきは、お付きの者は本陣ではなく、別の宿に泊まったということである。

▲大熊喜邦著『東海道宿駅と其の本陣の研究』(一九四二) 鳴海宿本陣屋敷図(国立国会図書館蔵)



鸚鵡籠中記は鳴海宿から名古屋の建中寺まで、棺の最後の行程を細かく記す。

・十一月八日 快晴 鳴海卯刻御発棺(御棺少さく甚輕し)。山崎にての御小休みもなく、已二刻建中寺へ御入。○御道本町通りより若宮の横町御通り、呉服町より京町通りへ御出。夫より直に建中寺へ御入也。○隼人正組(成瀬家)は、大須の前、寺崎守(竹腰正武)組は惣見寺の前、飛騨守(渡辺定綱)組は御旅所の方。○御城代組は呉服町通り、広小路東の方へ出。御老中等の組西の方に。御迎に出る輩多くわる考へにて油断、遅く出外る、者多し。

誠に悲しいお国入りであった。合掌。

(蓬左文庫 井上善博)

相応院消息

徳川家康の側室の一人で尾張徳川家初代当主義直の生母である相応院(お亀の方)(一五七六―一六四二)が、「ほんもんぜき」(本願寺門跡)に宛てた書状である。本願寺門跡から歳暮の祝儀として小袖二つを頂戴したことに對しての御札が書かれている。

お亀の方は、石清水八幡宮社家の志水宗清の娘として生まれ、城州八幡山に住む竹腰正時に嫁ぎ、万丸(後の尾張藩付家老竹腰正信)を産んだ。その後離別し、文禄三年(一五九四)家康に召されたとされる『士林派涸』。義直の出生から没後の四十九日法要までの年代記『源敬様御代御記録』によると、元和二年(一六一六)四月十七日に家康が死去すると、同年七月、義直とともに駿河より名古屋城の本丸に入った。その際、落飾して相応院と名乗るようになる。つまり、「相応院」という自著のある本書は元和二年七月以降に発給されたものと推定できる。

さて、宛所である本願寺門跡とは西本願寺門跡をさす。西本願寺とはかねてより交流をもち、その関係は晩年まで続いた。お亀の方は、家康が大御所として駿府城に住むようになると、義直や他の側室たちとともに駿府城に移った。当文庫

には、この頃に発給されたと推定される書状も堀田文庫蔵書として伝来している。その書状には大御所様(家康)へのお見舞いの文・自身へ美しい糸を二筋頂戴したことに對する御札と家康が息災である旨が書かれている。

また、幕府編纂の正史『徳川実紀』には寛永十六年(一六三九)二月に西本願寺の光円(良如)が大僧正就任の礼に下向した記録が、徳川美術館にはその同年の八月八日に出されたと推定される書状が残る。それにはこの春に久々に對面した時の喜びの思いが書かれており、何重にも強調の文言が用いられている点に、いかに良如に会いたかったのかがうかがえ興味深い。

お亀の方は、義直が幼年時、尾張家臣と家康をつなぐ政治的役割を担った。おそらく同様に、西本願寺をはじめ諸所と義直をつなぐ役割も担っていただろう。しかし、本書などからは、家康側室・義直の生母としてだけでなく、彼女という人物と西本願寺との交流がうかがえる。政治的側面だけでなく彼女の人物・交流が如何なるものだったのか考えるのも面白いのではないだろうか。

(蓬左文庫 亀井久美子)

【参考文献】

『蓬左』第三六号(名古屋市蓬左文庫、一九八九年)
『開館六十五周年記念 尾張家初代義直生誕四〇〇年 秋季特別展 徳川義直と文化サロン』(徳川美術館、二〇〇〇年)

蓬左通信

『蓬左』も気づけば一〇〇号を過ぎました。これまでは蔵書や講演会の要旨などを中心に紹介していましたが、今後はこのコーナーで、蓬左文庫の『今』をお伝えしていきます。

近年、外部の研究者と共に未整理の所蔵資料の調査・研究を進めています。伊藤満作(一八五九―一九一四)という大工に関連する資料もその一つです。まずは、寺社建築の専門家に協力を仰ぎながら整理を進め、寺社の建築図面や帳面などを分析していくことになりました。研究成果については改めて『蓬左』等で紹介します。ご期待ください。

(蓬左文庫 星子桃子)



調査の様子

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <https://housa.city.nagoya.jp/> 〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■休館日／月曜日(祝日・振替休日のときは直後の平日) ※催事により変更することがあります。
令和4年12月16日(金)～令和5年1月3日(火)は特別整理・年末年始により休館します。

■展示室／【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室／無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。

電話・郵便による申込み可。

